ある日、息子のこたろうがこんなことを言ってきた。

こたろう「パパぁ・・・・・僕もママがほしいよお・・・」

・・・俺は息子の言葉に胸が痛んだ。

・・・・・なぜなら俺の妻、
すなわち、こたろうの母はもういないからだ。

・・・息子はたびたびこういうことを言ってきた。

どうやらこたろうに自分のママを
自慢してくる友達がいるらしい。

・・・確かに母はいて当たり前かもしれない。
特に息子の歳ではまだそれが理解できないことでもある。

しかし息子はその友達からの自慢にたびたび傷ついていた。
なので俺は可愛い息子のため、その友達の名前を聞いた。
どうやらその友達はヨウタというやつで
こたろうとはよく遊ぶ仲良しの友達だったことが分かった。

その名前を聞いたとき俺は息子の授業参観の時を思い出した。
それはある母親が俺に話しかけてきたことだ。
ありさ「あの、もしかしたらこたろうくんのお父さんですか？」
俺はその母親を見たとき思わず衝撃を受けた。

そう、それが友達であるヨウタの母だったのだが
それがなんと美人母だったのだ。

そのうえ胸も大きいという・・・
まさしく母性を求める男なら憧れの母像のような女だった。

俺はその時、しどろもどろになりながらも挨拶を交わした。

・・・・・・・そして気づけば俺は駅にいた。

何故なら俺はあの授業参観の衝撃の後、衝動に駆られたのだ。

あの女とヤりたい。セックスしたい。
膣内にびゅるびゅると中出ししてやりたい。
そして・・・あの女をママにしてあげたい。

そんな衝動を抱えながら日々を過ごしたある日・・・

俺はその女がまさしく電車に乗るために
ヨウタを連れて駅に入ったところを見たからだ。

・・・いや実をいうとこれは偶然でもない。
もっともこれは俺がこの二人を家からずっと
追いかけただけにすぎない。

ヨウタの母・・・いや、ありさ。

この女のことを探ったからこその行動の終着点だ。

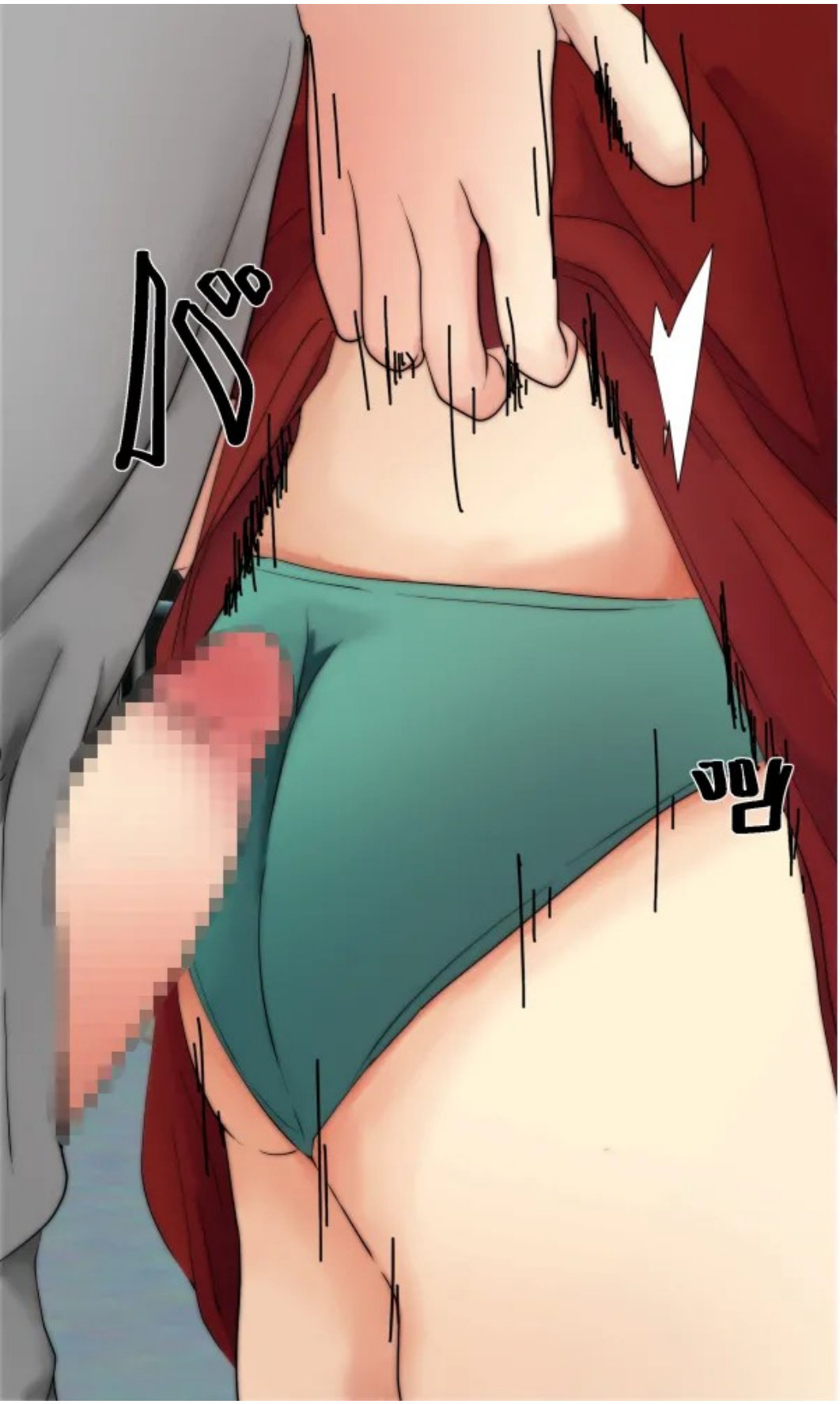
・・・・そりゃ息子はこんな母がいたら自慢したくなるだろう。
ましてやその母とセックスまでしてるならなおさら・・・・・

そう考えていると俺は段々と怒りがわいてきていた。
母がいない息子に対して
いくらガキとはいえデリカシーのない自慢。
そんなガキには天誅を与えたくなった。

俺は二人と同じ電車に乗った後、混み具合をなんとか利用し、
ありさとそのクソガキの後ろに陣取ることができた。

ありさの髪の匂い・・・ありさの後ろ姿・・・
天誅とはもちろん名ばかりで、俺はこの女を犯したかっただけだ。

・・・・・もうすでに自分のチンポは段々と起き上がってきていた。



俺はそのまま、自分のチンポを露出させた後、
ありさのスカートを急にめくった。
・・・正直俺ももうなにをしているかは自分でも理解不能だったが、
理性を性欲が押しのけた結果ということだけは理解できた。

ありさはその時、「えっ」という声をあげた。

そりゃそうだろう。

なにが起きているか全く分からないどころか
そもそも理解する前にすでに俺のチンポが
ありさの太ももと太ももの間に入り込んでいたのだから。

ありさの顔は驚いた顔からすぐに恐怖した顔へと変貌した。

俺はそんなありさの顔が見えたこと、
絶対にやってはいけないことをやっていること、
そしてなによりあのありさの太ももと太ももの間に
自分のチンポがムチムチと入り込んでいるということ・・・
その複数の事実がなによりの興奮材料となっていた。

俺はそんなありさを尻目に後ろだけではなく
前のスカートもめくりあげて、クソガキヨウタの
すぐ後ろに自分のチンポが見えるような感じにした。

ありさはあまりにも急な出来事と、
なにより息子にこの卑猥なことを見せてはいけないという親心で
声を出すことさえしなかった。

俺はそんな状況に感謝しながらそのままありさの太ももの肉の感触を楽しみながら素股をした。

ありさ「・・・・・・っ・・・・・・・・・・・・ぁ・・・」

自分の大好きなママが素股痴漢されているとも知らずクソガキヨウタはアホな顔をしていた。

お前のママがまさしく後ろで俺に犯されているというのに
ガキのくせに鈍感だな・・・と思い、
俺はそのままありさの耳をべろべろと舐めた。
ありさ「・・・・・・・・・・・っ・・・・・」

するとありさは少し体を震わせながら俺の方を見てきた。
既にありさの目には涙がたまっていて、まるで俺に無言でやめてと言っているような表情をしていた。
だが、俺はやめない。
これは俺の息子の仇だ。

そうして俺はそのままありさのムチムチとした太ももを
更に犯すべく強く腰を振った。

俺のチンポからは我慢汁がどんどんと溢れ、
それがまた潤滑油となって
俺のチンポの滑りをより良くしてくれていた。

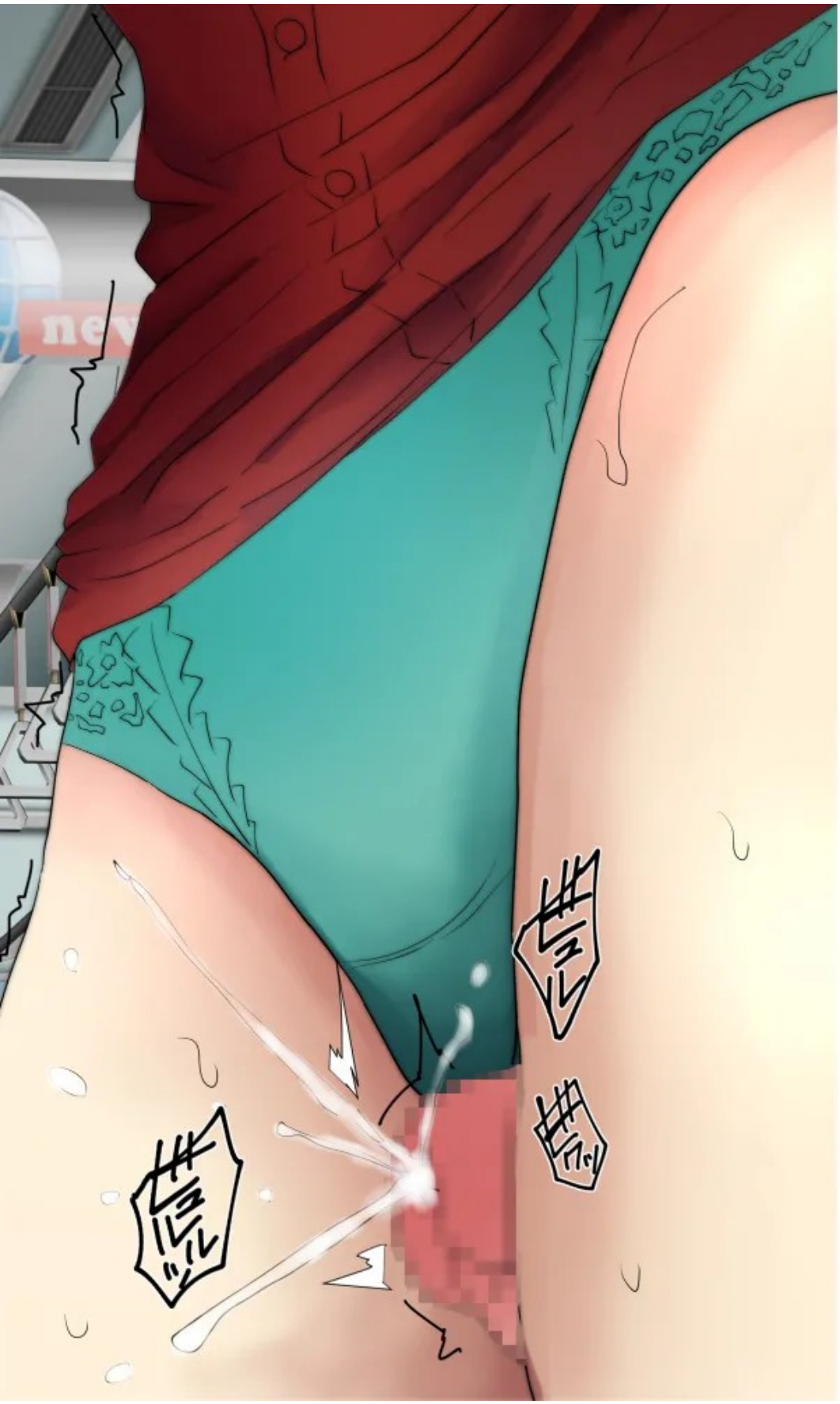
それにしてもこんなにも大好きなママが
痴漢されているというのに気づかない息子、ヨウタ。
果たしてそんな鈍感さでママを守れるのか？
俺みたいな親父に犯されてるのに守らなくていいのか？
などとそんなことを考えていたら俺はますます興奮してしまい、

俺は思わずそのまま発射してしまった。

そのまま俺のチンポからは幾度となく精液がほとばしり

クソガキヨウタの服にぶっかかっていった。

ありさ「・・・・・・・ぁあ・・・・・っ・・・・・」



ありさはそのまま何も言えず、ただただ息子の服にかかっていく俺の精液を見続けていた。

・・・自分が痴漢され
そしてそのままその痴漢を射精させてしまい、
挙句の果てに精液が大事な息子にかかってしまった・・・
そんな事実を目にして茫然としていたのだろう。

ちなみに俺はそんなありさの反応のおかげで、
ありったけの精液をありさの太ももの肉圧を感じながら
出し切ることに成功した。

しかし正直俺は一度精液を出したくらい・・・
いやましてやこのありさという女の手前、
一度の射精で終わらせるつもりは当然なかった。

ちなみにありさはそのまま俺の方をにらみつけてきたが言葉は発さなかった。

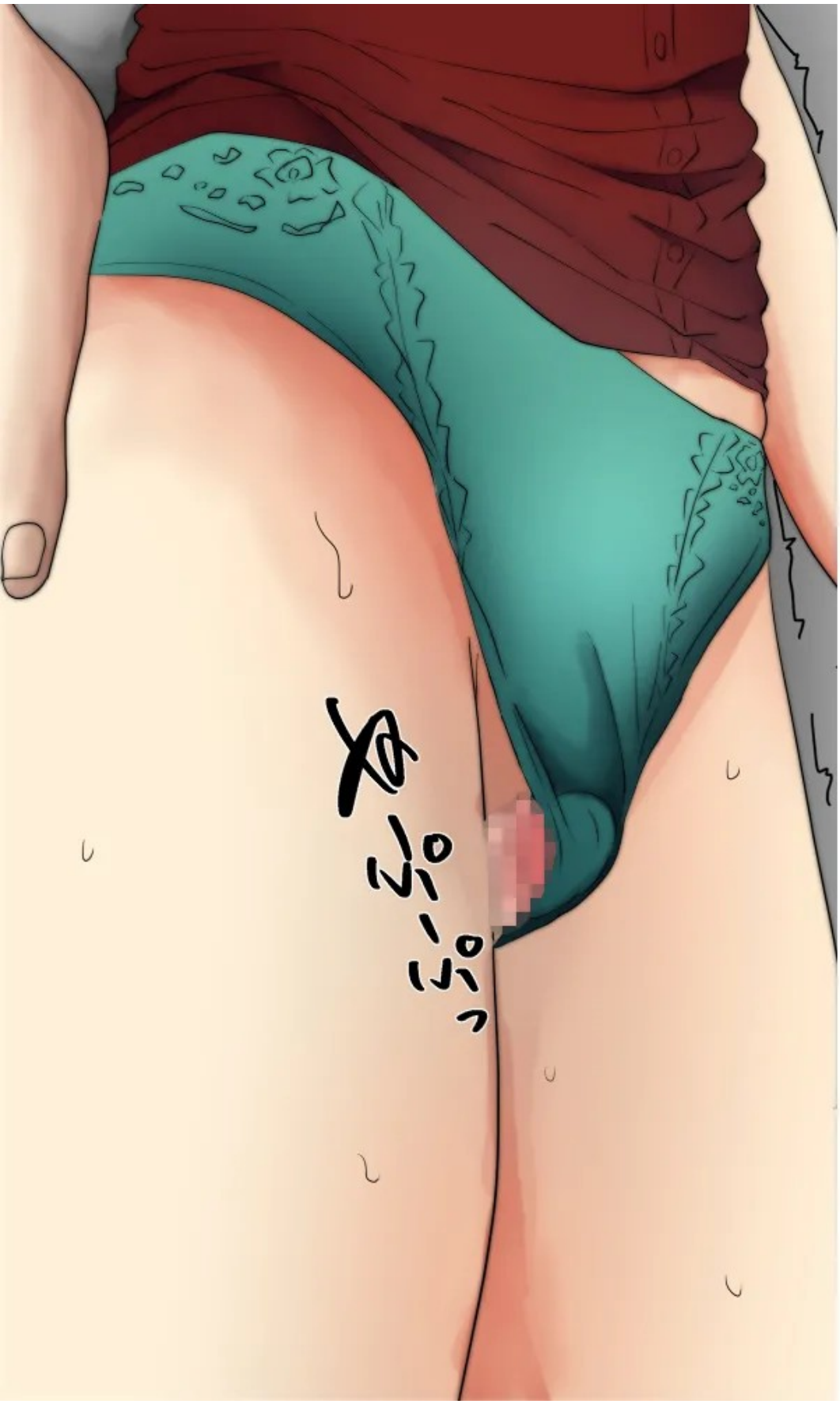
なぜなら息子にバレてしまうからだろう。

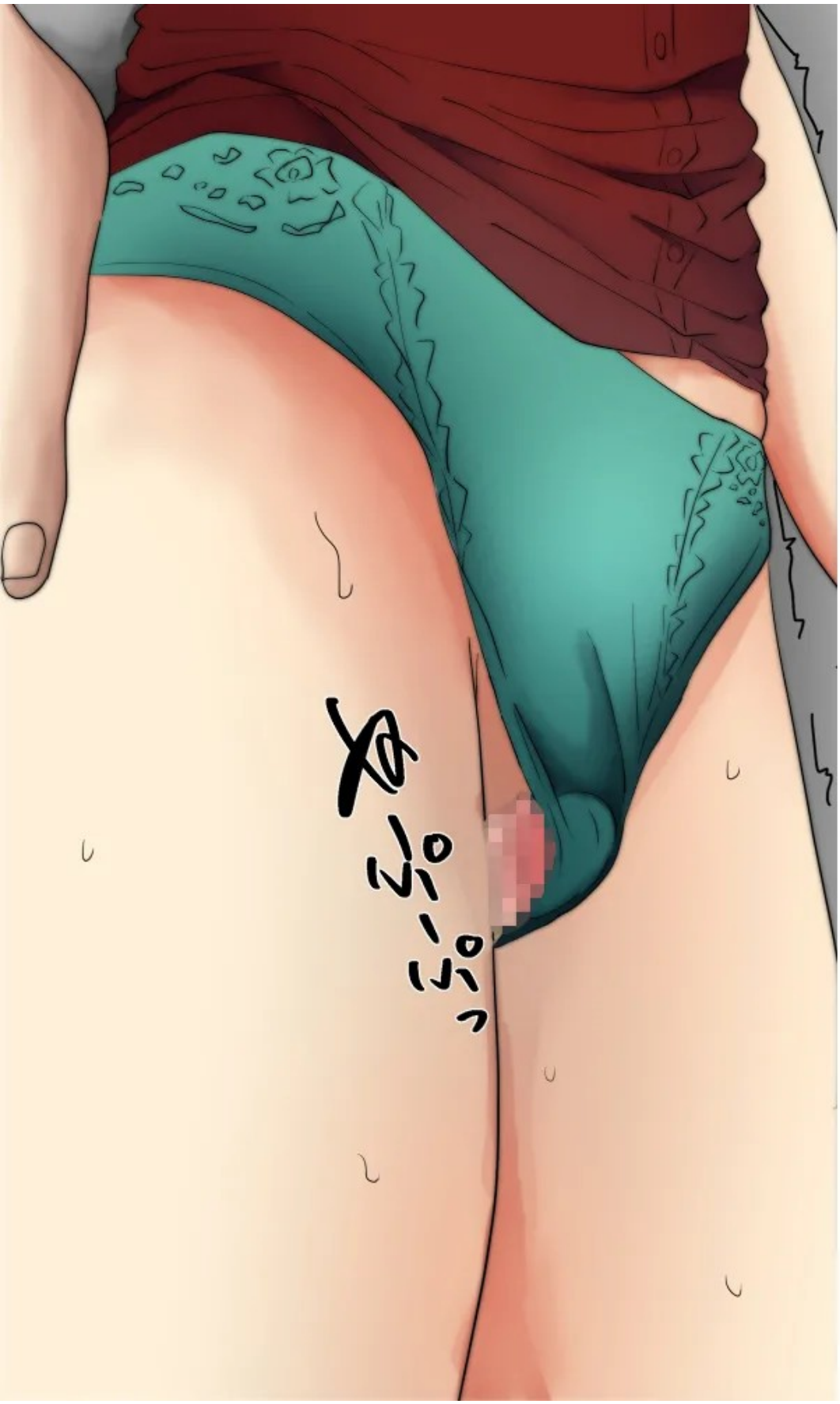
なんだったら無理に抵抗することもできない理由もまさしくそれだ。

俺は、そんなありさを見ながら、
自分のチンポを今度はありさのパンツの中に入れた。

ありさ「・・・・・・・っ!!」

ありさは身体をまた少し震わせたが
やはり何も言ってこなかった。

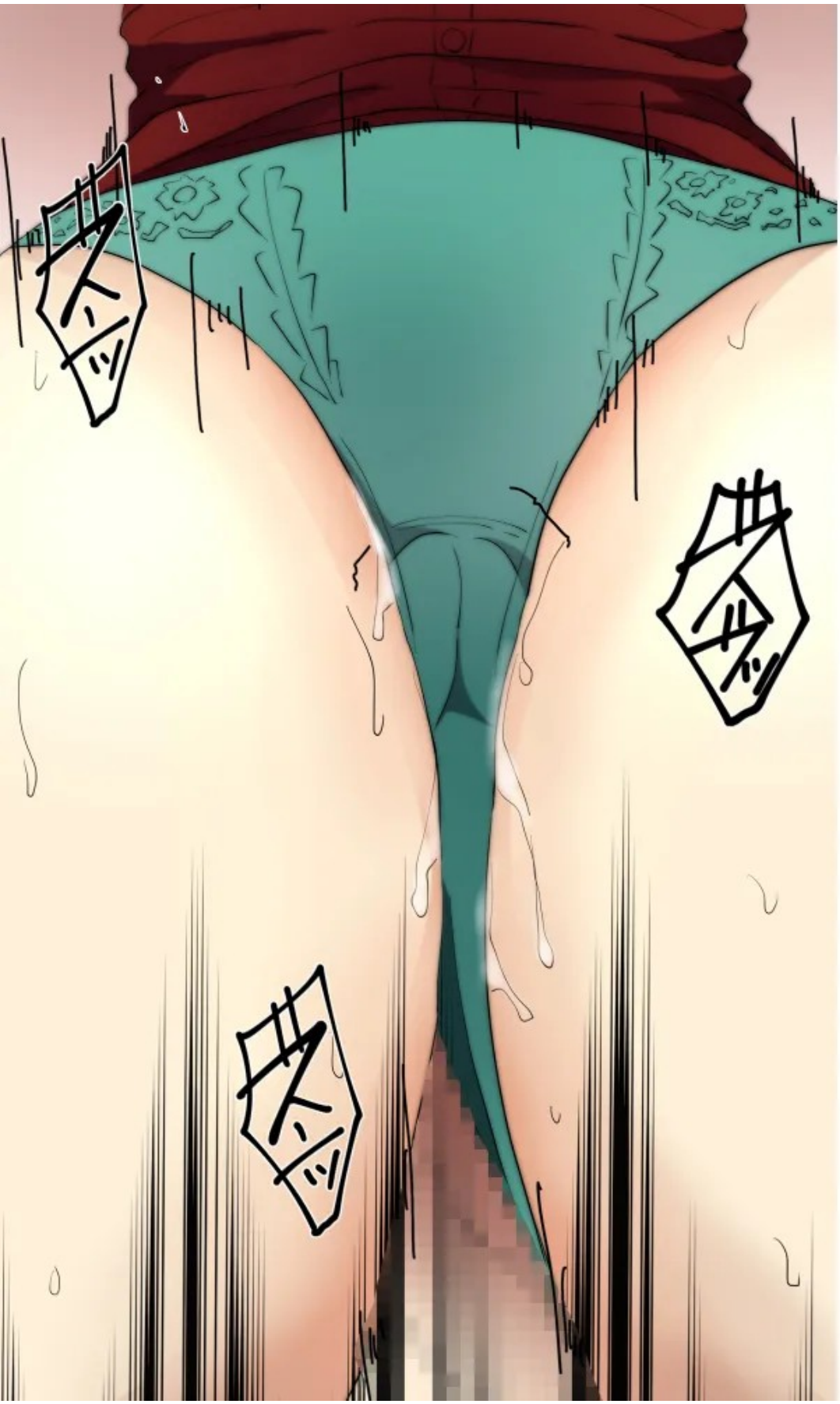


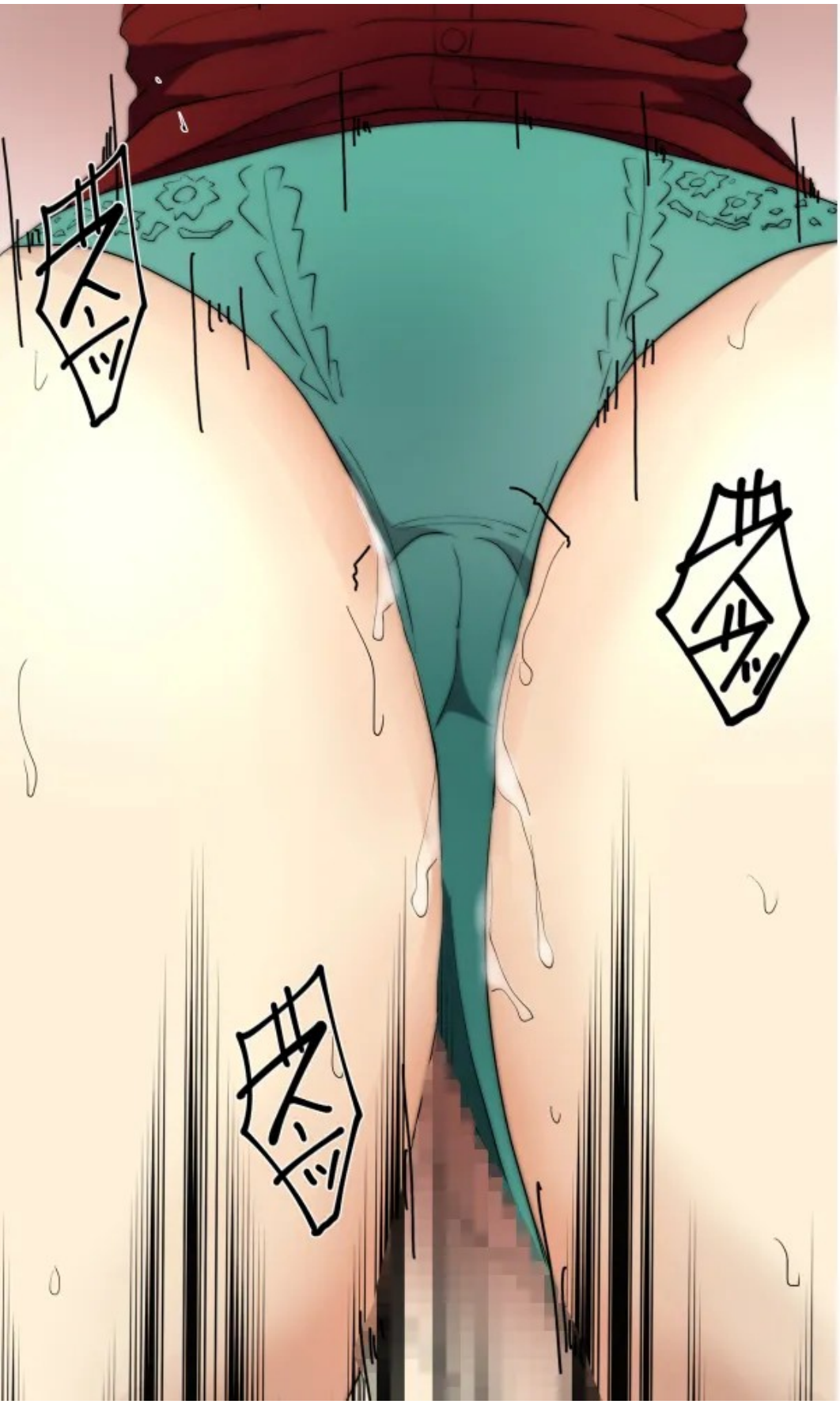


俺はそのままありさのマンコの存在感を
自分のチンポで感じたことに大変興奮していた。

それは言葉では上手く表現できないが、
なんというか・・・生暖かい感触というか、
汗ばんでいて少しぬるっとした感じが
俺のチンポを通じて俺の脳に刺激を与えてきた。

もう俺は頭の中がおかしくなりそうだった。
ありさのマンコとありさのパンツの中に
自分のチンポが挟まっているという非日常感。
そんな興奮のせいで俺の腰の動きは
もはや止めることなど全くできなくなっていた。





ニチニチニチ・・・多分、音を文で表すならこんな感じだろう。

ありさ「・・・・・・・・・っ・・・・・・・・・ぅ・・・・・・・・・」

ありさはひたすら声を我慢していた。

息子にこのことがバレぬよう必死に・・・

・・・ならこのチャンスに俺はありさのでかいおっぱいを
これでもかとまさぐってやった。

ありさはまた身体をビクンとさせたが
一切抵抗せずに
俺の乳揉みに身を任せていた。

すると、俺はそこで気づいた。

・・・・・この女、ブラをしてない・・・・・・

俺はその事実を確かめるべく、
ありさの服のボタンを外してみた。

……本当にノーブラだった。

ありさはこのおっぱいになぜかブラをしていなかった。

俺はその事実にめちゃくちゃ興奮して
またすぐにありさの乳をまさぐったと同時に、
あまりにもその興奮がチンポを刺激しまくったせいで、

俺はまた・・・・・射精してしまった。

ちょうどありさの乳を揉みながらの射精。

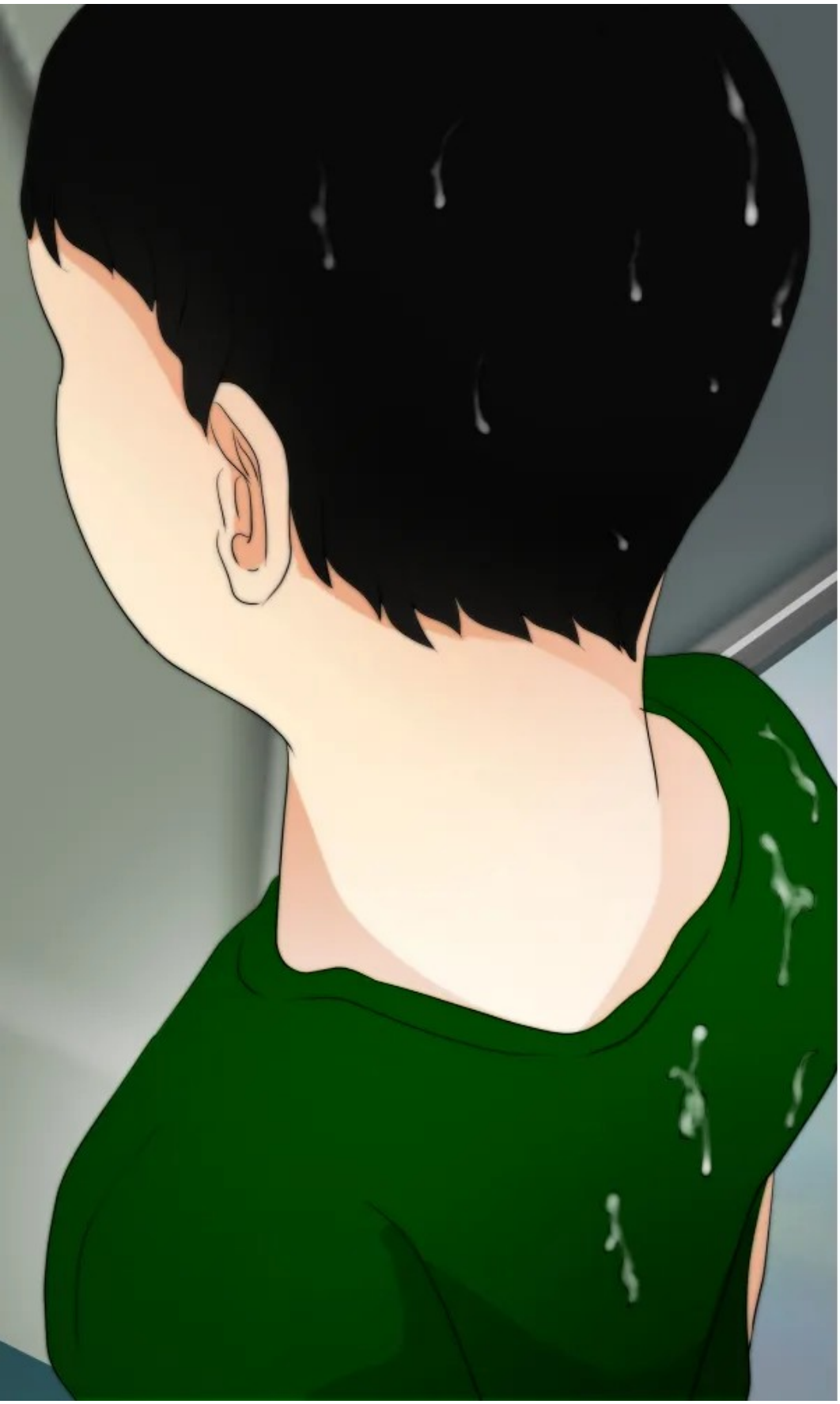
母乳もでるのかよと新しい発見をしながら・・・

俺はあまりにもひどく興奮した。

ありさのパンツの中には俺の精液が大量に放出され、
その量が量なだけにありさのパンツに
俺の精液がにじみ出てしまっていた。

そしてありさのおっぱいからは母乳がでる・・・

・・・・こんな興奮することあるだろうか・・・？



俺はそのままありさが見ているクソガキヨウタの方を見た。
するとクソガキヨウタの頭には大好きなママの母乳、
そして服には俺のきったない精液が付着していた。
ありさはそれでも何も言わずにただただじっとしていた。

俺はその奇想天外な出来事に興奮が収まらず、
すぐにありさのパンツを脱がして、
・・・そのままありさの膣の中に挿入してやった。
ありさ「ぇ・・・っ・・・・・・・・ぁ・・・・・・・ぁぁ・・・」

既に二度の射精のせいでありさのパンツの中と
太もも、そして膣付近には俺の精液がべっとりと付着していた。

ありさの膣はそれほど流石に濡れてはいなかったが、
俺の精液が潤滑油となって
ありさの膣内へスムーズに俺のチンポを導いてくれた。

俺はあのありさに挿入しているという事実に
もう気が狂いそうだった。

あの授業参観で見た日から、
何度も何度も頭の中で犯したありさ。

そのありさを犯しているという事実。

その興奮と車内の熱気のせいで汗が噴き出てきていた。
そして俺は汗だくのままありさに密着して腰を振った。
ありさの服に俺の汗が付着しシミとなっていた。
そしてありさも汗をかいて
ただただ俺のピストンに耐えていた。

そして俺は念願だったありさとのキスに成功した。
久しぶりの女とのキス。
それがこんな女との不謹慎なキス。
俺のチンポは更に膨張していった。

…ありさの唇はすごくやわらかかった。

乳も唇のやわらかさと
そしてありさの膣内の感触。

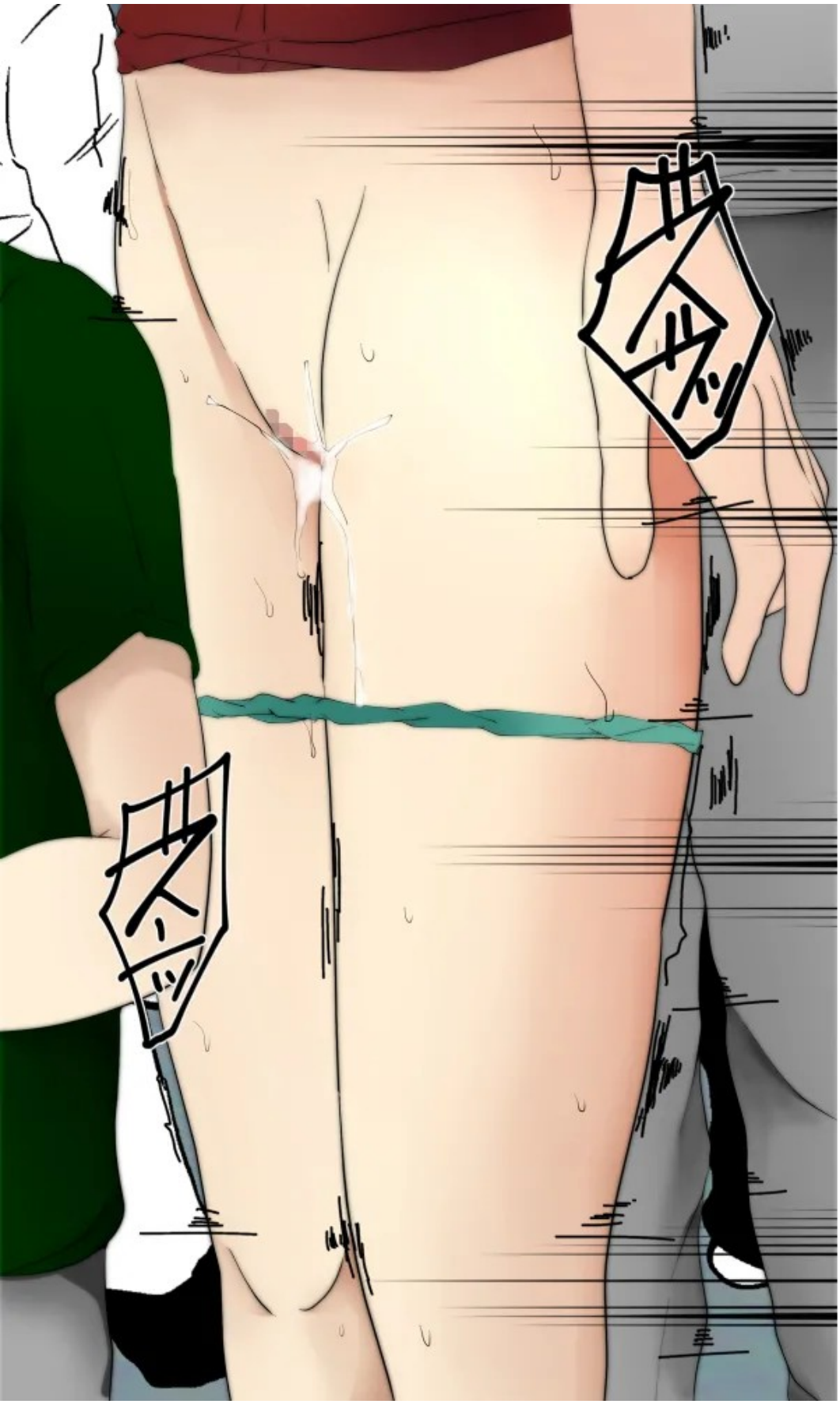
これらをすべて同時に味わう気持ちよさ。
ただただ最高だった。

俺はそのままキスをしながらただひたすらに腰をふりまくった。

ちゅぱっ・・・ちゅぱっ・・・

そんな卑猥な音が俺とありさの周りにだけ聞こえていた。

まるでそれはありさと俺だけの秘密の音のような感じだった。

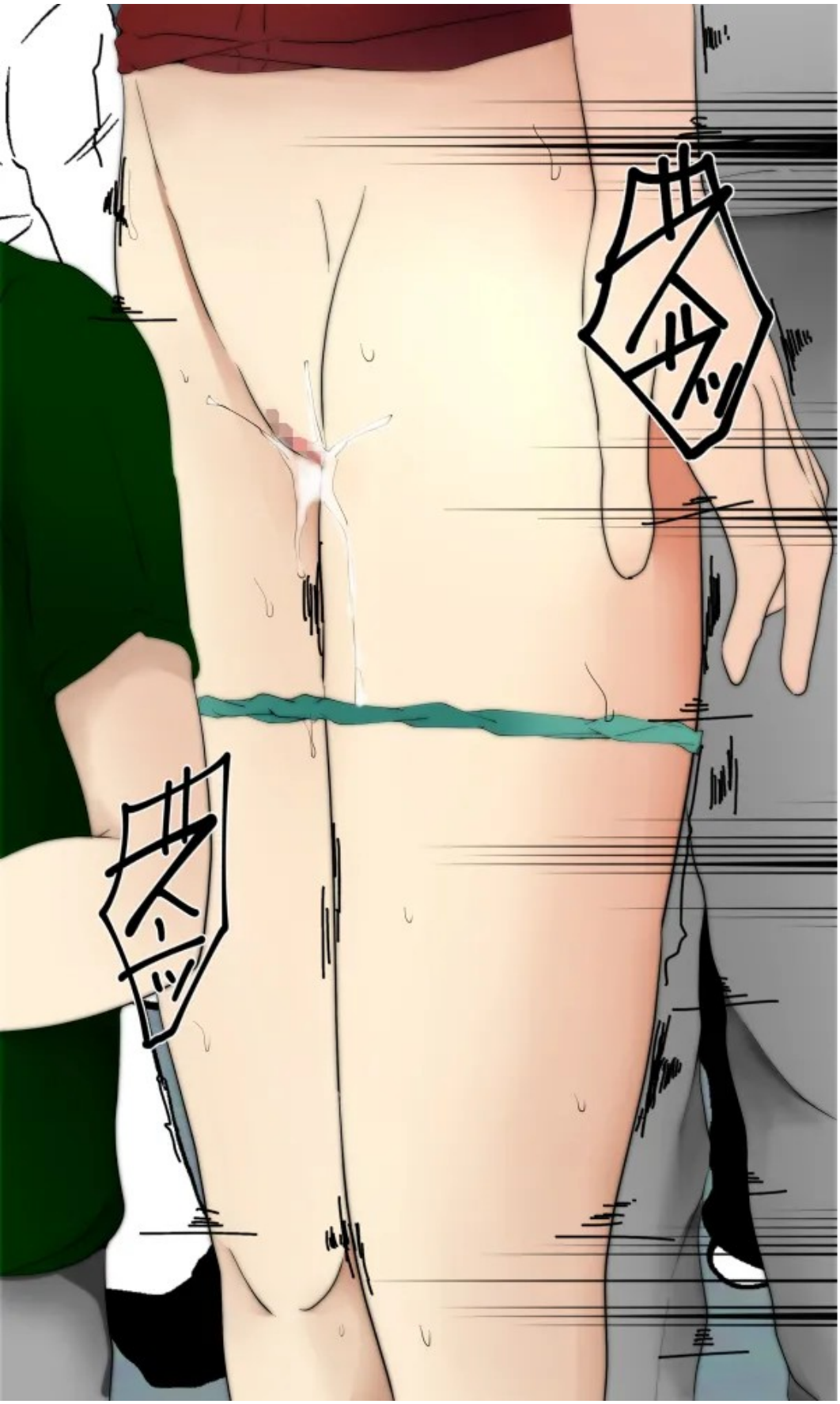


ありさ「んっ……んんっ……んちゅ……っ…」

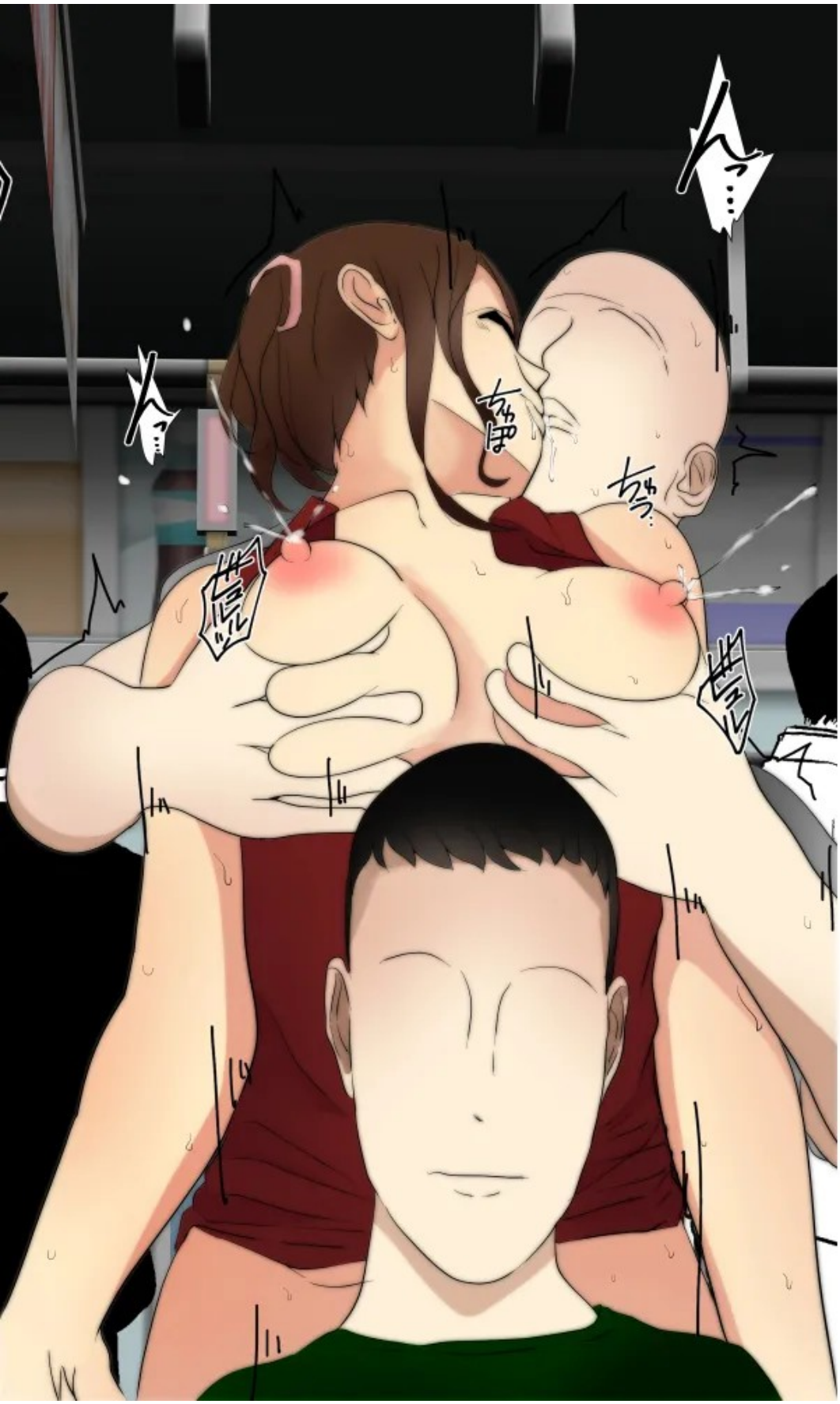
ありさもさすがに声を我慢しきれなかったのか

それともキスをされている手前だったのか分からないが、

少しだけいやらしい声がありさの口から出ていた。



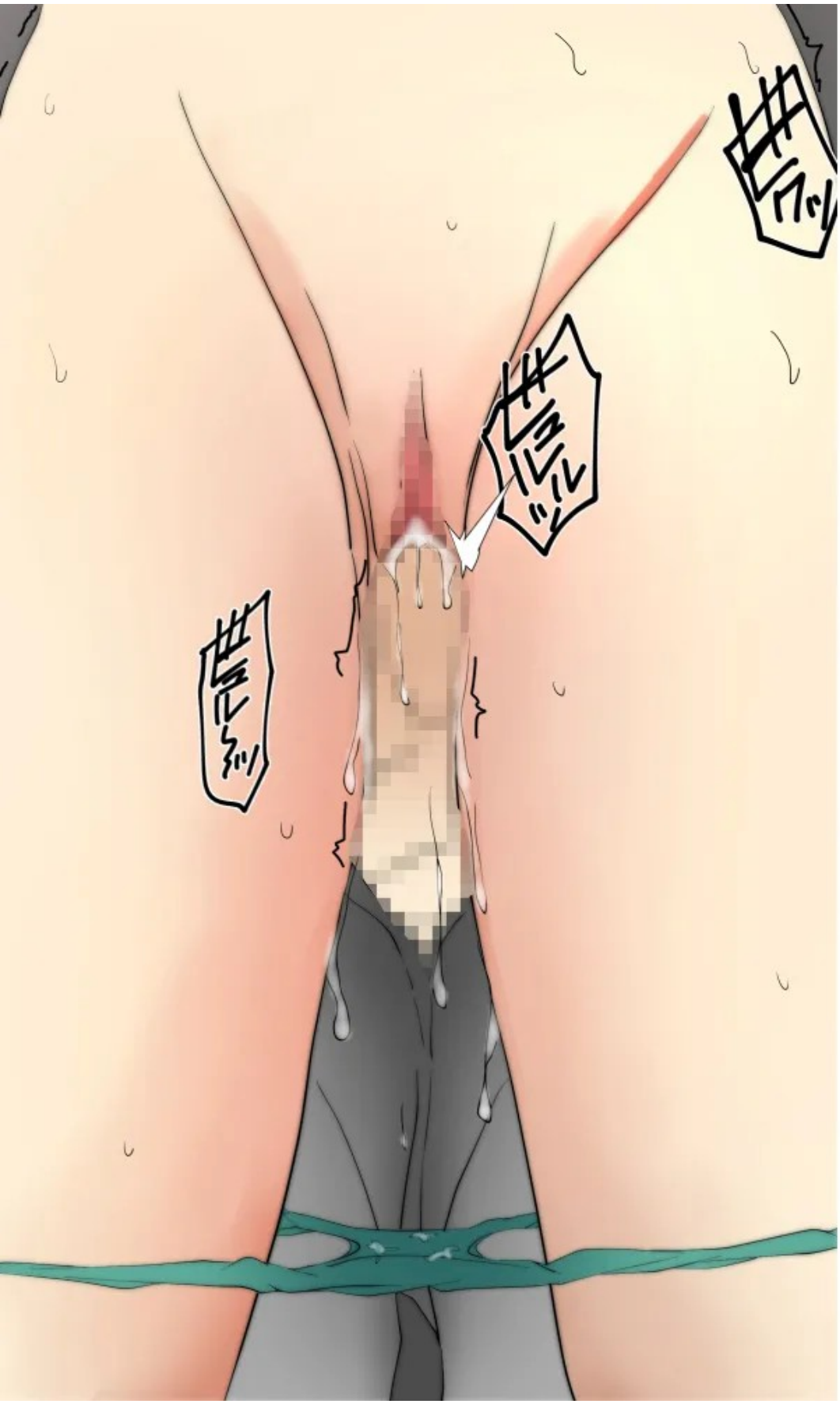
そして俺とありさがそんな卑猥なことを
まさに後ろでしているのにも関わらず
クソガキヨウタはずっとこっちを見る素振りもみせなかった。
まあ俺と・・・そしてある意味ありさには好都合だった。



そんな状況で俺は心の中でクソガキヨウタに煽っていた。

お前の大好きなママがお前が自慢していた友達の
父ちゃんに痴漢されてハメられてんだぞ。
お前の大切なママが中出しされちまうぞと・・・

俺はそんな煽りをいれてしまった手前、

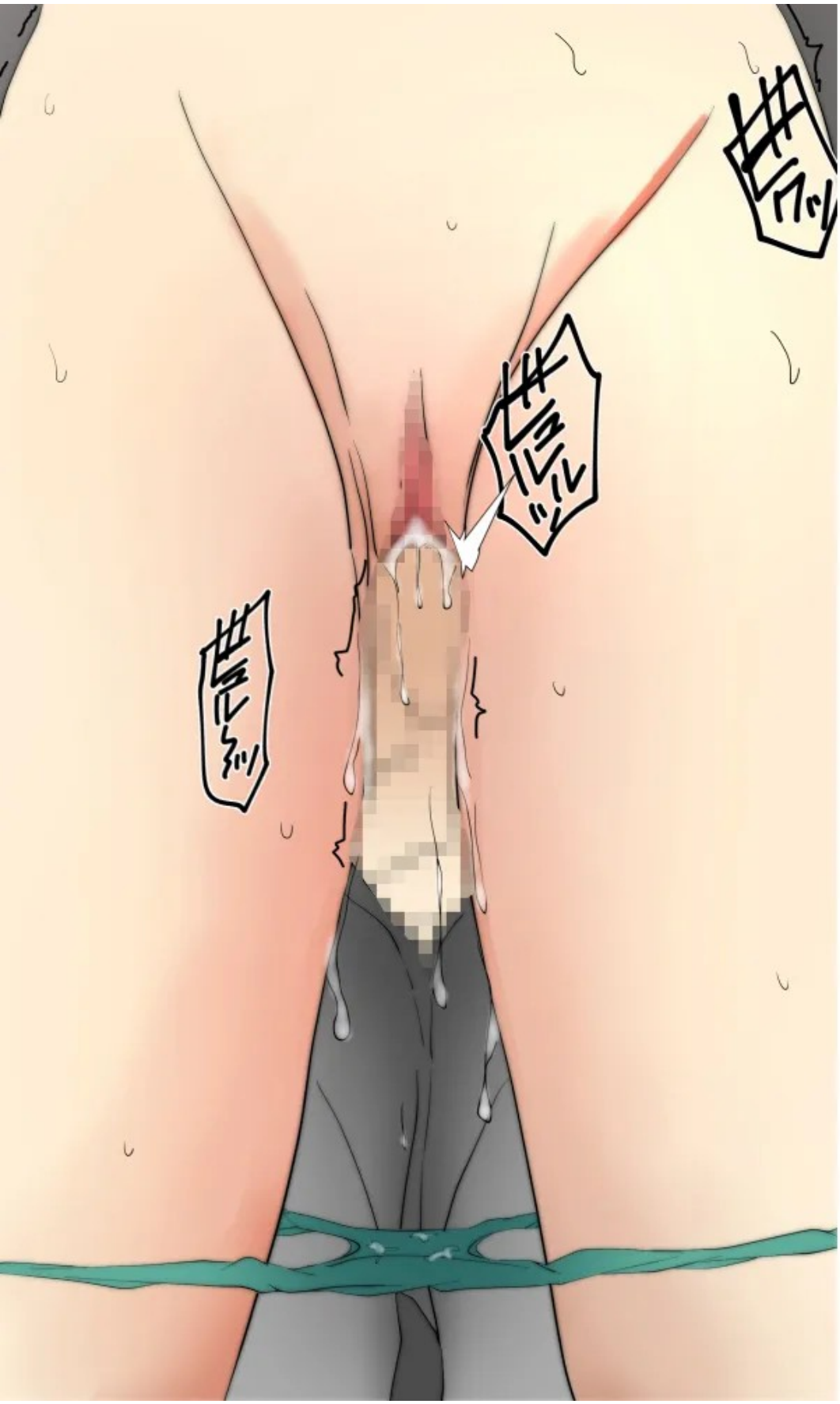


俺は本当にそのまま中出しをしてしまった。

ありさ「・・・っ!!・・・・・・ぁあ・・・・・・!」

ありさは小さく悲鳴を上げたがもう遅かった。

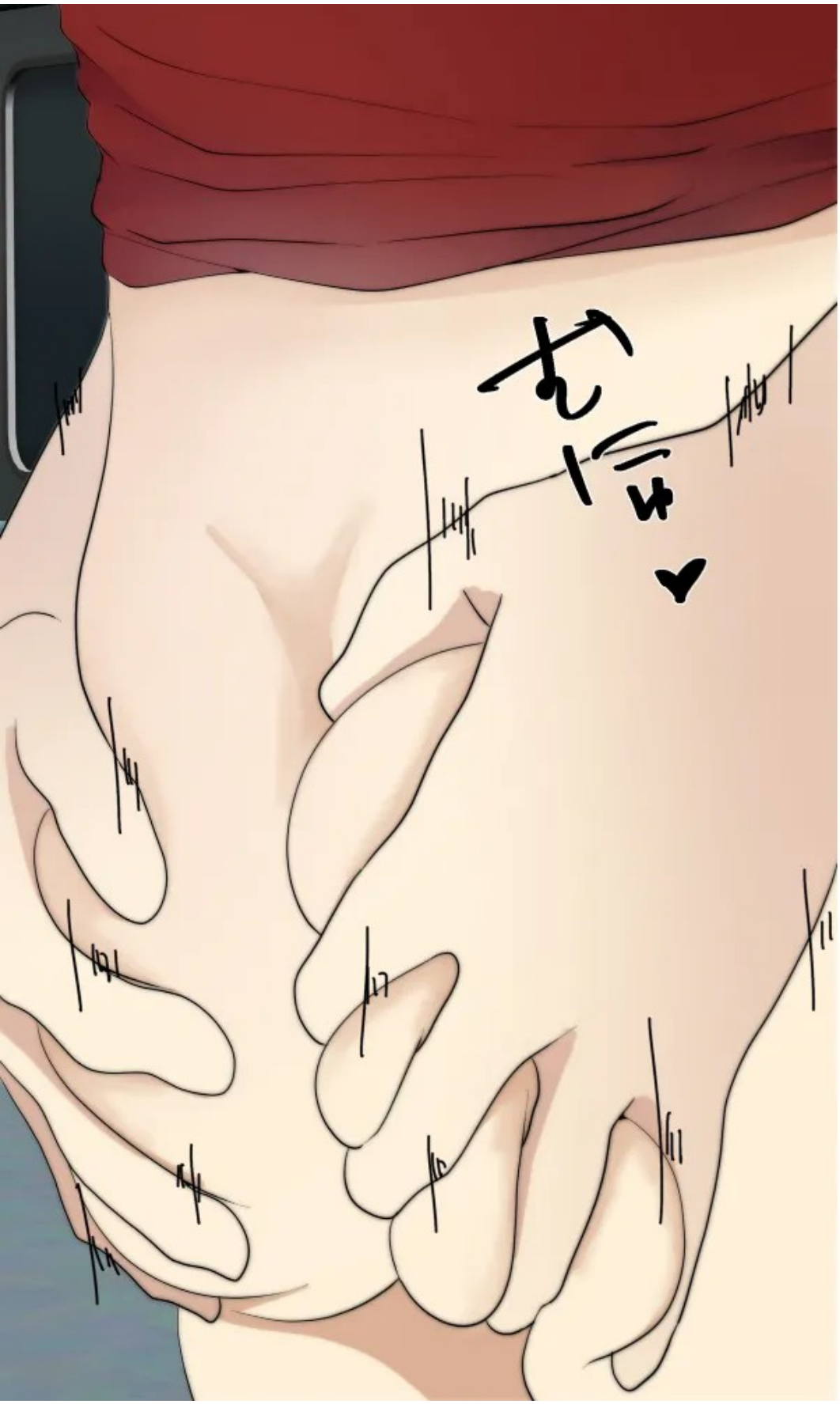
俺の三度目の射精はありさの膣内に注がれていったのだ。



ありさはそのまま俺を強くにらみつけてきたが
やはり声を出そうとはしなかった。

まあこんな格好で息子にバレても
最早言い訳できない状態ではあったけど。

それなら俺はまだその状況を利用しようと考えた。



・・・・・そう二回戦目である。

正確に言えば四回目だ。

俺はありさを無理やりこちらに向けさせて、

そのまま俺は再びありさの膣内に挿入したのだった。

俺はもうクソガキヨウタのことなど気にも留めてなかった。
それよりも俺は今目の前にいるありさという女に
果たして四回目の射精はできるのかという
熱き男の挑戦を果たすべく懸命に腰を振っていた。

・・・これはあくまで俺の推測だが
きっとありさももうどうでもよくなっていたんだろう。
もう息子の心配よりも俺とのセックスの快感に
必死に耐えるのに精いっぱいだったんだろう。
俺はそのままキスをしながら強く腰を振り続けていた。

息子の友達の美人ママと電車内セックス・・・

そんな至福なことは今までの人生で絶対なかった・・・

これは妻に逃げられた俺への
神様からのご褒美だったと思っている。

…そうして俺はそのままありさの唇の味を堪能しながら必死に腰を振った。

少しでもありさの膣内に精液を出すべく、ひたすらありさのこと、そしてありさ自身を感じ、全神経を自分の金玉に集中させた。

・・・・・結局俺は無事に四回目の射精をすることができた。

正直俺は若くはない。

性欲も少しだけ落ちてきていたと思っていたけど

・・・こんな女とならいくらでも射精できる・・・・・

俺はそのままありさとキスをしながら
ありったけの精液をありさの膣内に注ぎまくった。

あわよくば俺の子を妊娠してほしい・・・

・・あわよくば俺の妻、そして俺の息子のこたろうのママに
なってほしいと・・・そう願いを込めて射精し続けた。

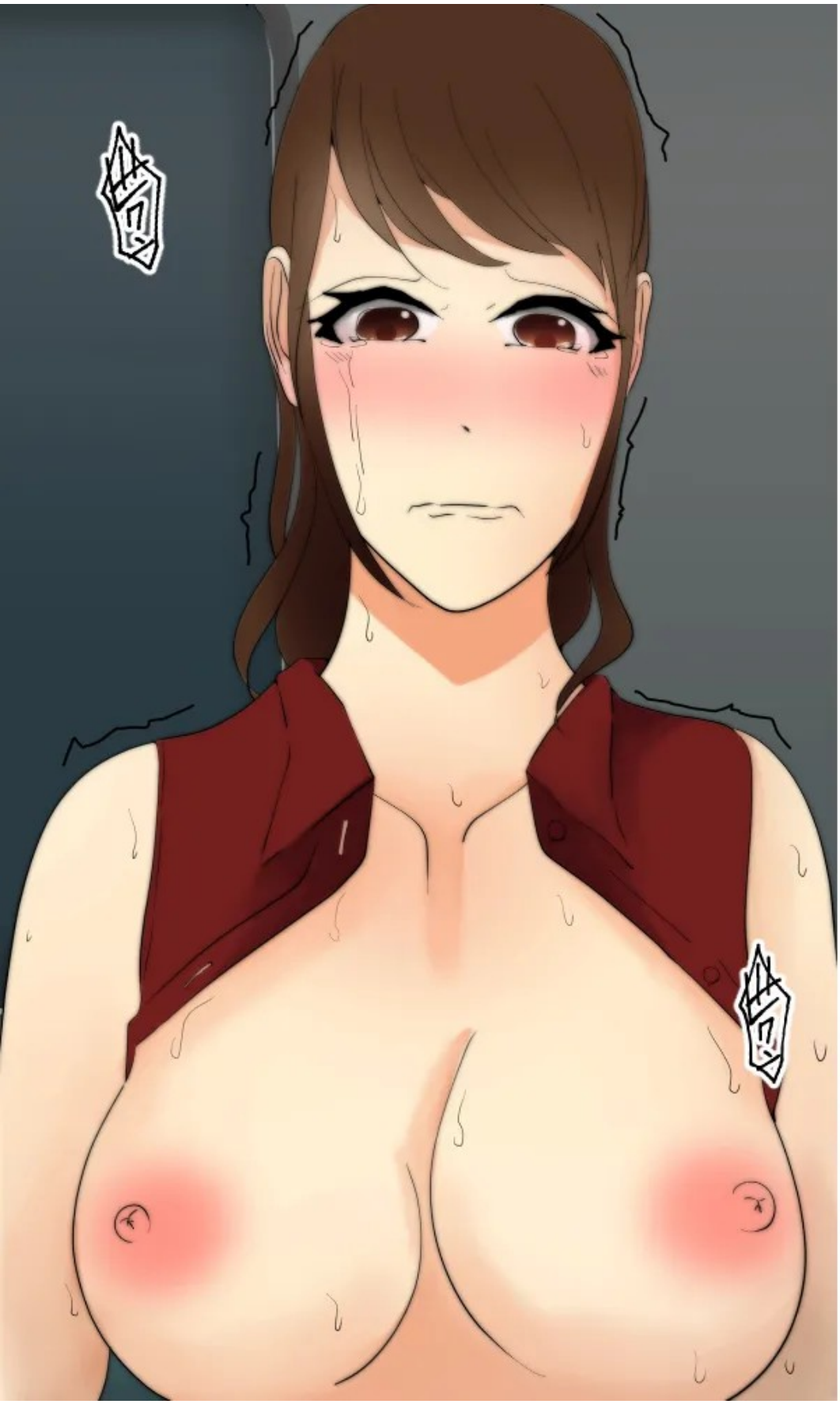
そうしていると、車内アナウンスが流れた。

「まもなくT-008駅です。お出口は左側です。」

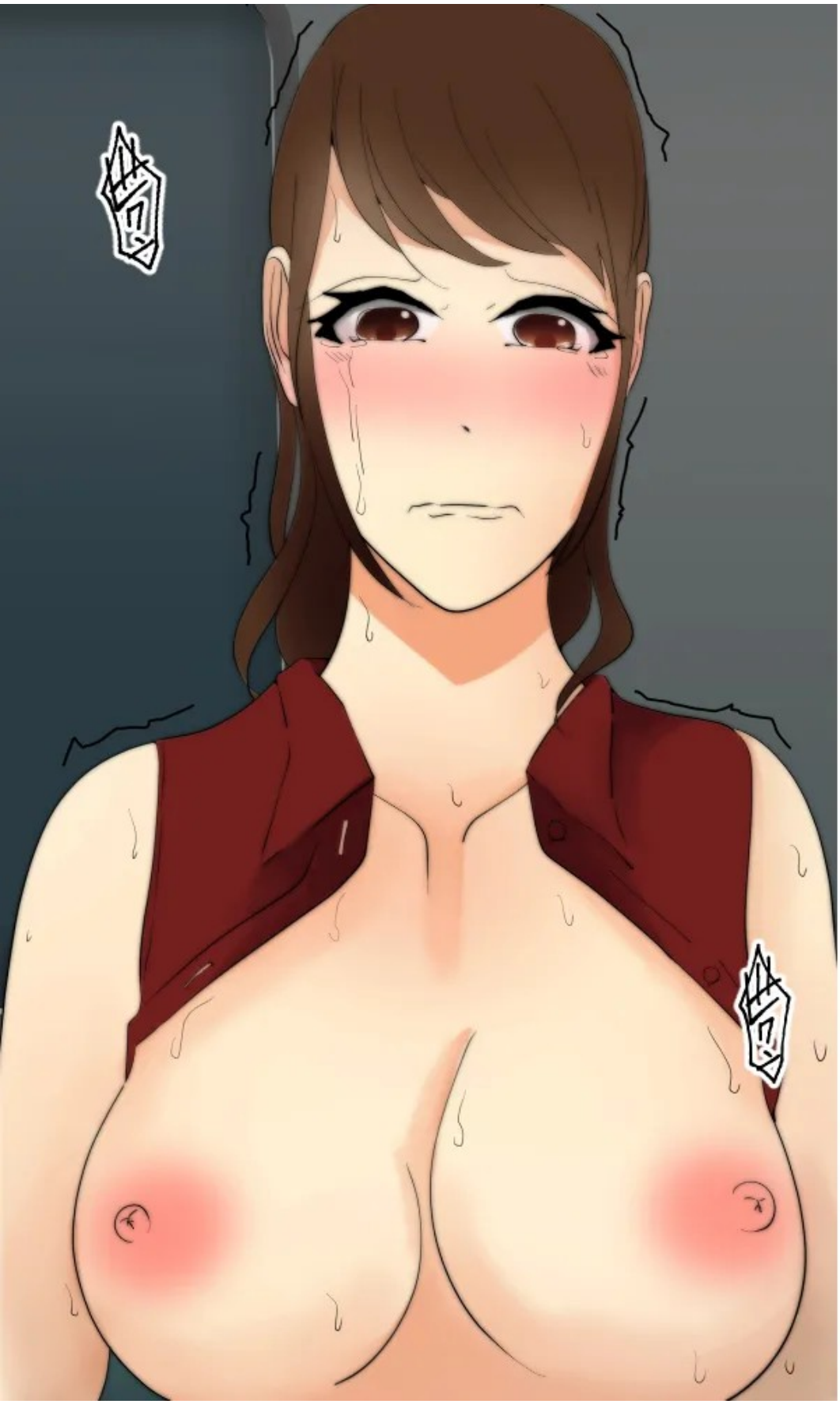
もうすぐ駅に着く、そうなるとさすがに周りの人たちにもこの痴漢行為がバレると思い、名残惜しかったがありさの膣内から自分のちんぽを引き抜いた。

すると俺の精液がどろっとありさの膣内から
ごぼごぼと音を立ててこぼれ落ちた。
とても四回目とは思えない量だった。
なんだったら
俺もまだまだいけるなと自信を持てるほどの量だった。

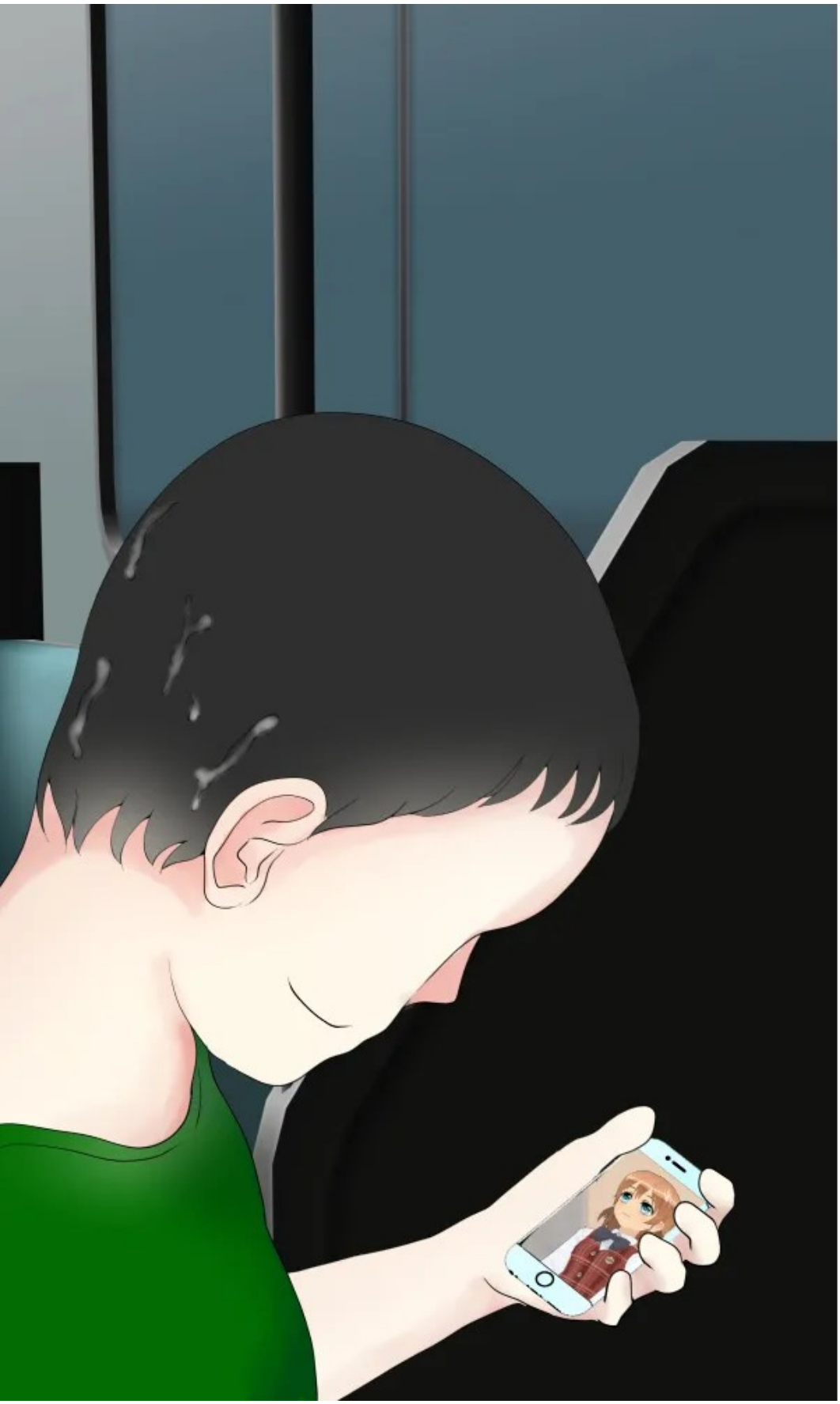
それで俺が降りる準備をしていると
ありさは黙って俺を見つめていた。
声も出さず、なにも動かず、ただただ俺を見つめていた。
目からは涙がこぼれ落ちていて
俺はその涙すら舐めたくなる衝動に駆られた。

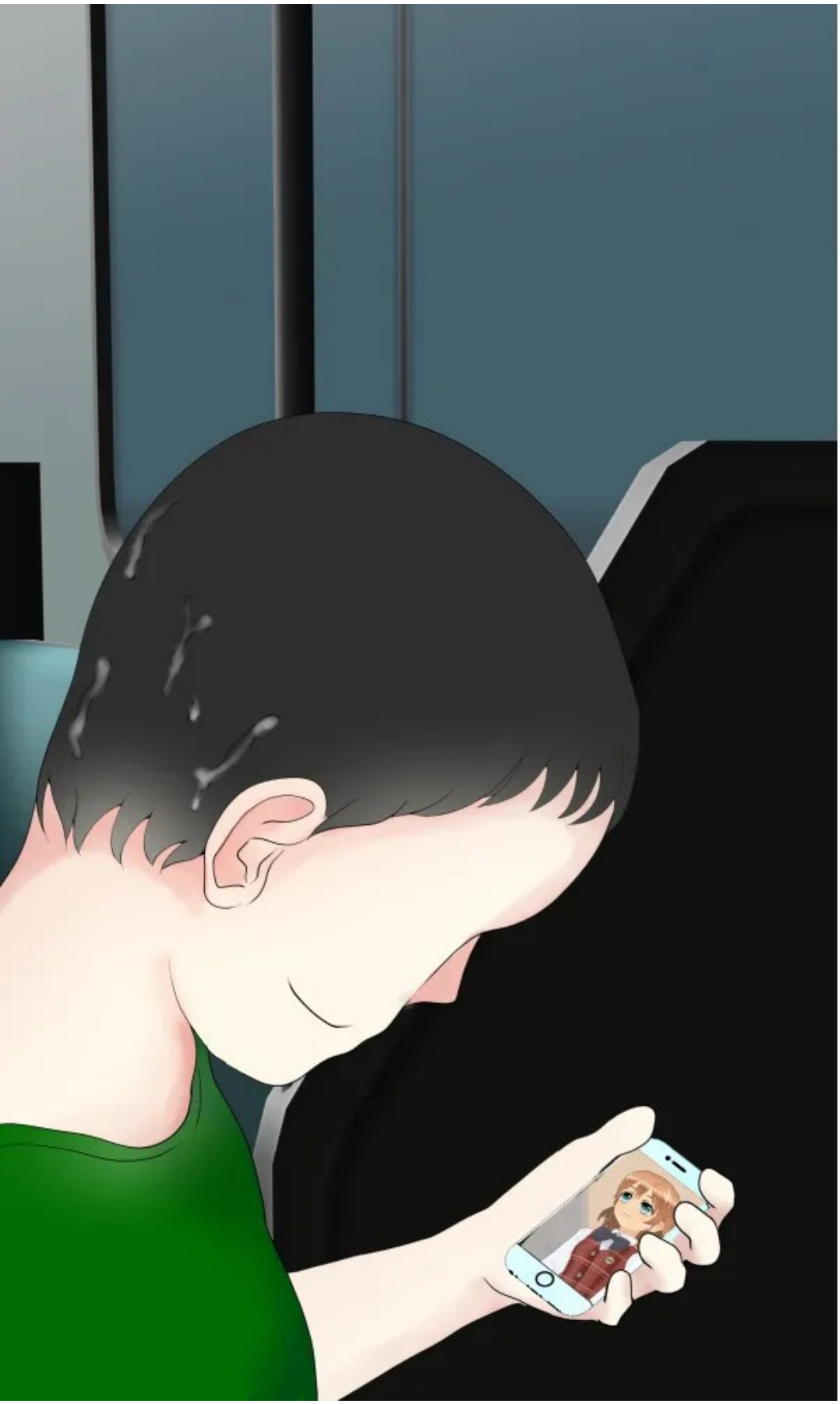


まあ当然もうそんなことをしている余裕はなかった。
俺はそのままありさに「気持ちよかったよ」とだけ言うと
ありさは俺の言葉を無視して
すぐに震える手で自分の服を直していた。
そうして俺もまさしく逃げるように電車のドア前に行った。



そしてそのついでに
俺はクソガキヨウタの方を気になって見てみると、
なんと自分用のミニスマホでアニメかなんかを見ていたのだ。
・・・なるほど、どおりで俺の行為に気づかなかったわけだ。





・・・俺はこの時心の中でほくそ笑んだ。

所詮子供だ。なにか一つ楽しいことがあると
そっちにだけ気をとられてしまう。
だから自分のママが痴漢されて中出しされても気づかない。
そんなおかけで俺はいい思いをさせてもらったというわけだ。

なので、俺はクソガキヨウタに心の中で感謝した。

「お前のママ、ごちそうさまでした。」と・・・

そうして俺は電車から降りたのだった。

この度はご購入してくださり本当にありがとうございます。
また私のほかの作品をご購入してくださる方々、
本当に嬉しいレビューや評価やコメントをしてくださる方々
本当に本当に本当に励みになっております。
いつもありがとうございます。
大変感謝いたしております。

今回はありさママを痴漢したかったので描いてみました。
一応前回のところからの分岐ストーリーみたいな感じです。
この痴漢ハゲは他の作品でも出した痴漢ハゲです。
そのハゲが出る作品もまだ完結してないので完成させないといけません。

そして正直未だに試行錯誤中です・・・
本当に皆様には大変申し訳ありません・・・

そろそろ普通の漫画形式で出してみたいなとも思うのですが、
これも正直難しいのです・・・
6月頃に一本実験で出してみようかなと思っています。

何卒これからも見守っていただけますと幸いでございます。
とにかくもっといいもの作れるようひたすら作りますので
これからも何卒よろしくお願い申し上げます。